

大阪偕行社附属小学校における舞台発表の史的考察

—片桐武一郎第8代校長の実践—

基盤教育機構教授 東田 充司

はじめに

追手門学院小学校では、11月の文化祭において学級劇発表を行う伝統がある。西日本最古の私立小学校が誇る教育活動のひとつが舞台での劇発表であり、表現活動が盛んな全国の私立小学校を牽引していると言っても過言ではない。創立110周年記念事業の一環として設けられた110記念ホールが、その披露の舞台である。最大900名を収容できる本格的なホールは、昭和初期に全国のモデルスクールと称された大阪偕行社附属小学校時代の講堂の後継施設であるが、いずれも小学校単独の施設としてはそれぞれの時代に類を見ない水準のものである。それ以前の旧講堂が無かった明治・大正時代には、隣接する設立母体である大阪偕行社本社の講堂で行われていた。27期生で1916年（大正5年）卒業の森脇竜雄氏寄稿の山桜会報第3号によると、「偕行社の講堂は、（中略）学校の木造平屋の粗末な建物にくらべて、おそろしく立派に思われた。厚い絨毯が敷かれ、豪華なカーテンが重々しく垂れ下がっていた」とのことである。施設面からだけでも、追手門学院小学校は前身の大阪偕行社附属小学校の発足まで遡って、舞台発表を行う背景として極めて恵まれた施設を有していたことが分かる。

筆者は、36年に渡って所属した追手門学院小学校から、本年度追手門学院大学に異動した。2015年に日本世代間交流学会第6回全国大会が追手門学院で行われた際には、佐々木実初等中等教育長、田邊雅一幼稚園長と共に、「母校が繋ぐ多世代交流－私立小学校を例に－」というテーマで、会場校シンポジウム報告を行った。そのご縁もあって、本年度行われた第9回全国大会において「演劇による心情育成－疑似体験による世代間交流の試み－」の発表を行った。2008年に122期4年に組で行った学級劇に関して、本年度に成人を迎える卒業生の劇発表後10年の意識の変化を分析したものである。

この研究の発端は、追手門学院大学に在籍する、ある122期4年に組卒業生の存在にあった。この学生は追手門学院中学校を経て、追手門学院高等学校を表現コミュニケーションコース1期生として卒業している。まさしく表現教育における一貫連携教育の体现者であると言える。さらに、この学生の保護者も追手門学院小学校80期卒業生であり、在学中はもとより今回の学会発表にあたり、保護者ネットワークを挙げての調査への情報収集にご尽力いただいた。世代を超えて親子間で

継承されている追手門学院小学校で実践されている表現教育への深い理解を、改めて感じる機会でもあった。

130年の時を経て、大阪偕行社附属小学校から伝承される舞台発表の史的考察を試みる中で、より良い一貫連携教育を推進するべく小論を記す。ここに大方の御批正をお願いするものである。

1. 大正初期までに大阪偕行社附属小学校で行われていた舞台発表について

国家有為の人材の育成を創始とし、社会有為の人材の育成に継承される教育理念は、1888年に創設された大阪偕行社附属小学校の時代から現在まで脈々と継承されている。創立70周年を機に刊行された『七十年志』によれば、大阪偕行社附属小学校では創設当時から舞台での児童発表の機会があったが、各教科におよぶ研究発表会としての位置づけであり、単に劇発表だけを目的としたものではなかった。以下、戦前の偕行社時代には「学芸練習会」と称した舞台での研究発表会の箇所を引用して、その概要を示す。

学芸練習会

児童学業の奨励と、平素学習した事項の練習をなさしめると共に教授訓練の統一を図り、公衆の面前に於て思想発表の能力と、決行の勇氣とを養わんが為に、毎年(十一月)学芸練習会を開催することにした。これは全児童の練習を本体とするが、人員、時間、材料及び児童の程度により尋四以上と尋三以下の二部に分けて行うこととした。此の外臨時に学年を単位として学級学芸会を開くことがある。(尋四以上学級自治会の事業として每学期一回位開催)

学芸会の材料は広く各教科より採り、談話、説明、解説、対話、朗読、対読、斉読、輪読、英語会話、実験、手工細工、席上揮毫、描画、独唱、合唱、斉唱、楽器演奏、速算、暗算等各種の方法により一人の出演時間を短くし、成るべく多くの児童を出演せしめることとした。教材により又その演出法に興味を持たせるために多少演劇に類する方法をとることもあるが、全然教材にない劇をやらせたり、又特別の舞台装置をしたり、衣装をつけたりはさせないことにした。(大正七、八年頃からは一般小学校で学校劇、児童劇と称して、子供の劇がだんだん流行してきた)

効果的な演出法としての演劇の価値を認めながらも、あくまで研究発表としての学習内容が主体であることが分かる。演劇的な手法については、あくまで「多少」であって、特別の舞台装置や衣装を着けさせない指針は、数少ない男子小学校として発足した質実剛健の校風からの推奨によると推察される。戦時下および戦後の中断を経て、1949(昭和24年)年に戦後第1回の学芸会で劇発表が復活した際には、保護者手作りと思われる劇衣装を児童全員が着用している写真が残っている。手作り感に溢れ、華美を極力避けているところに、偕行社時代の教育風土が継承されている。この点については、現在でも保護者に作成を依頼する劇衣装について、華美になる可能性が大きい

という点から貸衣装は一切認めないし、どのような化粧も禁止である現在の追手門学院小学校の教育方針との指針と合致する。

現存する最古の教育内容の記録として、1915年（大正4年）に刊行された『大阪偕行社附属小学校学報』が存在する。本校設立の趣旨および沿革・学校規則・教育の方針とその施設等、当時の小学校の全貌が詳細に記録されており、当時の本校の教育を語ると共に、日本の教育史における貴重な資料でもある。大正期に我が国の小学校において、学報の発行される例は極めて稀であり、しかもその内容の充実には瞠目すべきものがある。

この学報発行は、大正天皇御即位の大礼を記念してのものである。さらにその背景には、その2年前に着任した片桐武一郎第8代校長（1913年から1938年まで在職）の存在がある。創立25年目にして初めての文官校長であった片桐校長は、弱冠29歳で小学校長に就任し、剣道の創設をはじめとする教育内容の刷新、二度に渡る校舎新築、同窓会、保護者会の組織化など、次々と学校改革を進めることになる。25年間に渡り自ら教壇に立ちながら、天下の名門校と称せられるに至る牽引者でもあった。この学報の中では、着任早々の片桐校長が行っていた教育の詳細を覗うことが出来る。

この学報の中に、大阪偕行社本社の講堂で行われていた1914年（大正3年）学芸練習会の演題一覧が掲載されている。（なお、引用に際しては、旧漢字は常用漢字で表記する。）

学芸練習会順序 大正三年十一月

◎午前部（自午前九時 至同十一時）尋常科第三学年以下、 略之

◎午後部（自 正 午 至午後三時）尋常科第四学年以上

一、一同入場

一、一同敬礼

一、学校長開会の辞

一、演 芸

一、競 馬 (朗読) 尋五 二十五名

二、数 蘭 (説明) 高一 一名

三、平和なる村 (暗踊) 尋六 四名

四、青 森 県 (説明) 尋五 二名

五、席上揮毫 (随意画) 尋四 十名

六、天慶の乱 (談話) 高一 一名

七、菅原道真 (談話) 尋五 二名

八、楠木正行 (朗読) 尋四 六名

九、廣瀬中佐 (朗読問答) 尋四 六名

十、七生報国一死心堅再期成功含笑上船 (書き方)	尋五	五名
十一、水平の母 (朗読談話暗唱)	尋五	四名
十二、軍馬の忠義 (朗読)	高一	三名
十三、珠算の練習 (速算)	尋四	十六名
十四、石 炭 (説明)	高一	一名
十五、北 海 道 (説明)	尋六	三名
十六、諸葛孔明 (朗読)	尋六	三名
十七、加藤清正 (談話)	尋五	三名
十八、英 語 (対話)	高二	三名
十九、エドワードジェンナー (談話)	尋四	三名
二十、何時も精神 (朗読)	尋四	十六名
二一、酸とアルカリ (説明)	尋六	二名
二二、ナポレオン (談話)	高二	四名
二三、欧州戦乱の原因 (談話)	高一	二名
二四、日独戦争に就いて (談話)	高一	二名
二五、蠶 (談話)	尋四	一名
二六、水害見舞いの手紙及び返事 (朗読暗唱)	尋五	四名
二七、測候所参観の記 (朗読)	高一	一名
二八、昔の族 (談話)	尋五	二名
二九、徳川吉宗 (談話)	尋六	一名
一、唱 歌 金 剛 石		
一、学校長講評 及び閉会の辞		
一、一 同 敬 礼		
一、順 次 退 場		

演目は、その時代や国内外を問わず幅広い教科科目から選ばれ、尋常科6年に加えて高等科2年の在学者が存在したことを勘案しても、発表内容の高さが見て取れる。創設時より行われていた、日本の初等英語の先鞭を付けた対話による英語発表も、私立小学校としての大きな特徴である。談話、説明、朗読、対話、対読、斉読といった区分表記から判断できる範囲ではあるが、大阪偕行社本社の講堂舞台では、発表にあたって何等かの身体表現も付加されていたのかもしれない。創設当初より英語が正課であったことに加え、社交ダンスを学ばせていたことから、その可能性は考えられる。

創立百周年の記念事業のひとつとして、卒業生記念文集が発刊され、筆者もその編纂委員の一員として数多くの寄稿文を読む立場となった。卒業生の方々に投稿を呼びかけるとともに、『七十年

志』、『八十年志』、『山桜会報』、『追悼録』『片桐武一郎先生』に寄せられた手記等は再録された。残念ながら、ここでは明治・大正初期に在学された方の新規の寄稿はなかった。ただ、1907年（明治40年）から翌年まで1・2年生に在学の20期生である伊吹武彦氏（京都大学名誉教授）が『八十年志』への寄稿文に、当時の舞台発表の様子が綴られている。以下、氏の「昔語り」から引用する。

二年生のはじめであったか、講堂で学芸会があり、私たちの組は遊戯か何かをやった。たいへん尾籠な話で恐縮であるが、舞台の上で熱演中、だれかがウンチをして泣き出した。事柄が事柄だけに、そのときのことははっきり記憶しているが、共演者の名はもちろん、粗相をした子の名はまるっきりおぼえていない。ところが、ふとしたことから、共演者の一人の名が二十五年ぶりにわかったのである。私は京都の三高に進んだが、そのときの同窓に大岩誠君という人がある。大学を出て間もなく京大法学部の助教授となったが、滝川事件のとき、滝川教授に殉じて京大を去った。この大岩君と、私はある日なんとはなしに幼いころの話などしていたが、彼はふとこういった。——「二年生のときの学芸会に、たれかがウンチをしてねえ」——それを聞いて私はびっくりした。「ほくにもそんな記憶がある」——「じゃ君とほくは、三高で同窓だった上に、偕行社もいっしょだったのか。」——それにしても、あの時の“犯人”は君だったんじゃないか——「いや、君らしいぞ」 いずれにせよ二人は“臭い仲”だということに話は落ち着き、二人の校友はずっとこの思い出といっしょにつづいた。

これらの内容に加えて、沈滞気味であった学校の教育と組織の改革に精力的に取り組むことを目的に片桐校長が着任する背景を勘案すると、公立小学校で行われていた学芸会と同様の舞台発表が行われていたと推察する。ここでは、1907年（明治40年）に小学校規則を改正し、軍人養成を教育目標としない学校に転換した事実を特記する。翌年の1908年の入学者49名のうち、軍関係子弟はわずか6名であり、財界、法曹界、医学関係者子弟から多数の入学者があった。片桐校長による教育改革を進め、建学の理念である国家有為の人材の育成の為の、特色ある私学教育の前段階と考えられる。

2. 大正中期から大阪偕行社附属小学校で行われていた舞台発表について

片桐校長が教育改革を進めた大正中期から昭和前期、創立25年から50年の四半世紀は、文字通り大阪偕行社附属小学校の全盛期であった。この間、教育の充実と信頼される人材の輩出が社会からの信頼を得、「大阪の偕行社」と世に喧伝されるに至った。名門偕行社の名が広がったのは、創立時からの独特な建学精神「国家有為の人材育成」や教育内容の充実にあったことは言うまでもないが、四半世紀に渡り教育活動推進の中核となった片桐校長の功績が多岐である。片桐校長の定め

た教育目標は、戦後改められる点を除き継承され、現在まで追手門学院小学校の重要な教育目標として継承されている。この点から、名称は異なっても、今でも同一基盤に立つ教育が実践されている。

陸軍の将校クラブである大阪偕行社が設立母体であるにもかかわらず、多くの卒業生が厳しい躰教育と共に「自由な校風」を回想し、その背景として必ずと言っていい程に片桐校長の存在を挙げる。4年生以上の英語、5年生以上の剣道、6年生の修身を自ら教え、全校児童の氏名を記憶していた。1938年(昭和13年)卒業の後に(旧制)北野中学校に進学した49期生の稲畑勝雄氏は、2000年に大阪府立北野高等学校同窓会六稜会の取材に際して、以下の通りの回想を述べている。

私は大正15年1月14日の生まれですから、今年満74歳になりました。兵庫県の芦屋で生まれて、すぐに京都に住んでいた祖父の所へ移りました。そこで小学校3年まで育ち、それから大阪の上六の近くへと引っ越しました。

そこから大阪偕行社【かいこうしゃ】附属小学校に通いました。今の追手門学院ですね。この小学校は北野と同じように自由な校風の学校で、片桐武一郎という有名な校長先生がいたことを覚えています。1学年90名、全校生徒が540名いたんですが、片桐校長は生徒全員の名前を覚えていたとのこと。昭和13年に卒業して北野中学へ進みました。偕行社からは12~3名も入ったでしょうか。優秀な小学校だったんです(笑)。

山桜会報第14号への寄稿文「校長在職二十五年間の追憶」の中で、学習指導方針の記述がある。「画一主義、詰込主義を排し、自発的に自己の力を開発するようまたは子供の個性を尊重し個々の能力に応じた学習指導に努め、各自の学力増進のため教師は常に工夫研究してこれにあたること。」である。また、「児童の自発活動によってそれぞれ自己の個性に応じて学習事項を会得することが肝要である。」とも述べている。これら片桐校長の教育方針こそが、それぞれの自主性や自発性を伸ばさせ、卒業生からは「自由な校風」と受け止められていたのである。大阪師範学校卒業後すぐに大阪師範学校附属小学校訓導に採用され、そのわずか4年後に大阪市立道仁小学校の教頭に迎えられた片桐校長は、師団長から大阪市長への校長適任者推薦依頼に基づき大阪偕行社附属小学校に着任した。この経歴からも、極めて優れた力量を有した訓導であり、自ら理想とする教育を大きく展開していったのであろう。

では、片桐校長の児童への指導の実際はどうであったのだろうか。ようやく片桐校長の理想とする教育実践が順調に推進し始めた頃、教え子である1922年(大正11年)卒業で33期生の岩井公平氏は、追悼録『片桐武一郎先生』で下記の通り学芸会での英会話発表の思い出を語っている。

校長室の方へは幸い呼び出されたことはなかったが、唯一度六年生の時(多分卒業式の時?)学芸会があり、そのリハーサルには毎日連続して校長室に呼び出され片桐先生じきじき

に絞られたことがあった。その時の演しものは片桐先生御担当の英会話であったが……。当時一般の小学校で英語を教えていたところは余りなかったと思うが、そんな時代に英語を課目に採り入れ、しかも校長自らが教鞭をとられたことは特に勇断であり、非常に進歩的なお考えをお持ちになっていたことが窺え唯々敬服するばかりである。学芸会の英会話は坂部幸雄君との対話での舞台の両袖から出て来て出会いがしらに“グッドモーニング”“ホアッチュアネーム”“マイネームイズ イワイ”“ホエア アー ユーゴイーング”“アイム ゴーイーング ツー カイコーシャ プライマリースクール”……位まで今でも覚えているが、まがりなりにも五、六分間英語をしゃべって、“グッドバイ”で幕になったのであるが、参観の父兄から万雷(?)の拍手を頂いたことであった。まだアルファベットもろくに覚えていなかった我々によくもあそこまで根気よく教えてくださったものと感心すると同時に、先生がいかに新しい教育に熱意をお持ちになっていたかその片鱗が見えて、今更ながら頭が下がる思いである。

昨年度のことであるが、岩井公平氏のご息より、お父様が長年保管されていた数多くの小学校在学当時の写真を学校にご寄贈いただいた。校長室で多くのお話を拝聴したが、いかに片桐先生の教えが素晴らしいものであったかを、お父様がいつも口癖の様に言っていたことを強調された。

また、岩井公平氏の一年後輩の1923年(大正12年)卒業で34期生の近江友七(鈴木太良)氏は、同じ『片桐武一郎先生』に下記の寄稿を寄せている。近江氏はその当時神戸山手女子短期大学教授であったが、教育界で活躍する卒業生が片桐校長時代には特に多い。以下引用する方々もそうであるが、優れた教育者であった片桐校長の影響が大きいのかもしれない。

無職隠居

先生の風貌 古武士 さわやかに英語国語教へたまひき
英会話 学芸会上演す 英語の先生 われに役立つ
先生に 国際会議報告を 聞いて貰ひぬ。同窓会にて
大正の代は 自由主義 文官の校長として、偕行社に来
友垣の自由びと ここに集ひをり。先生のこと 口にしつつも
友垣は 横のつながり 先生の縦のつながり 口ぐちにすも
現職にあること 毎日歩くこと 養生訓を述ぶる友あり

やはり、学芸会での英会話発表が挙げられているところに、片桐実践の実際が見て取れる。さらに、「自由主義」や「文官校長」に、旧来の教育に囚われない新教育へのあくなき追及の姿勢が読める。さらに、同じ34期生の坂上武一氏は、城南学園理事長であったが、城南学園小学校の初代校長であり、城南学園中高等学校第3代校長でもあった。追手門学院校友会山桜会副会長であった坂上氏が、大阪城南女子短期大学を創設するにあたり、1933年(昭和8年)44期生の林匡夫氏

（大阪城南女子短期大学元副学長）を招聘する間のいきさつを、林氏は編者として追悼録『片桐武一郎先生』のあとがきで次の通り回顧している。

当時山桜会副会長であった坂上武一氏（大正十二年卒）が昭和四十年、短期大学を創設されるに当り、私に教授として協力するよう強く推されたのが実は片桐先生であったことも今忘れられない事実である。昭和三十九年、数回にわたる坂上先生のおすすめにも、自然科学者としてはともかく、大学の教育者としての踏み切りが仲々つかなかつたので、はかばかしい御返事をしなかつた私の元に、片桐先生がわざわざ足を運ばれ強くすすめられた結果、私を踏み切らせたのが片桐先生のお力であった。現在私に少しでも教育者としての能力がありとするならば、そのかくれた能力を洞察して引き出して下さったのが、坂上学長と片桐先生のお力であったと言える訳である。

一般的に、大学や高等学校ではない、小学校長とのここまでの師弟関係は考えにくい。英語、剣道、修身を自ら教えていたことに加えて、日常生活での児童との触れ合いが実に大きかったのである。初等教育が人間形成における基礎教育であることは言うまでもないが、率先垂範を教育の第一義とする片桐校長のお思いを、教え子がしっかり受け止めているのである。実際にあつた教育活動の様子を、片桐校長は山桜会報第13号への寄稿文「偕行社時代における私の教育理念」で、こう述べている。

以上が私の在職二十五年間の一貫した教育理念で、偕行社精神といわれたものである。この方針の実効を収めるために私は事務を執らない時は校長室を出て子供達の生活圏に入り込み、子供達に接触して膚から肌訓化の浸透を図ることが大切で、躬づからの率先垂範が最も効果的であると考え、いつも先生方の先頭に立つか、少なくとも何事も一緒に行なうことに努めたのである。（中略）

私は学校構内正門西側に舎宅があつたが、昼食の際は宅から持たせて来た弁当で各学年交代で教室で子供達と会食して、食事中や食後にいろいろの話をすることとした。この会食は各学年とも担任先生にもやめて貰つたのである。このように、できるだけ子供に接したので、その氏名は勿論のこと、その性格や成績などを知ることができ、教育上大そう都合がよかつたのである。（中略）

私の在職二十五年間に卒業した者は千六百名（昭和六年までは一組だけで約五十名づつ昭和七年から二組となつて約百名、大正七年まで高等小学校があつたが、中学に入学できなかった者だけで極めて少数であり、しかも一学年だけで二学年卒業というのは殆どいながつた。それも大正七年からは六年卒業生全部中学に入学したので大正七年から高等科を廃止した。この内約二百名ほどが戦死または病死者で現存者は千四百名くらいだろう。

それらの卒業生の中には、大学の教授となって世界的権威者として有名になっている学者も相当にあり、その他官界、政界、実業界、刀圭界等社会各方面で重要な地位に就いて活躍し指導的役割を果たしている人が多数で、学校設立の目的が十分達成せられ、名門校としての声価を挙げていることはまことに慶ばしい限りである。

片桐校長が目指した教育は、自発的に自己の力を開発するとともに、ひとり一人の個性を尊重し個々の特性を生かしたものであった。現代においても理想的であり、誰もが目指すべき初等教育の姿である。双方向授業の必要性が叫ばれて久しいが、片桐校長が偕行社で実践した児童の発表の場が、講堂での舞台発表であったのである。

おわりに

1万3千人を超える大阪偕行社附属小学校以来の卒業生の声は、現代の追手門学院小学校で行われている教育を論究する際に不可欠である。創立25年目から四半世紀の片桐校長時代の卒業生1600名の恩師への声は、教育への優れた見識と実践への賛美はもとより、稀に見る素晴らしいその人柄に至る。教育界で解決すべき難題が山積する現代においても、立派な指針として高く評価すべきものである。追手門学院小学校は単なる戦前から続く歴史の長い伝統校だけではなく、貴重な片桐実践を継承発展させる中で常に最先端の教育に対応し、特色ある私学として求められる教育を継続しているのである。

山桜会報第71号で、1936年（昭和11年）卒業の47期同窓会9名での対話記録「さあ、80才にして起とう」が掲載されている。この中で、入江国太郎氏が片桐校長の教育に対する強い決意と母校の教育の先進性を語っている。中興の祖としての片桐校長を表現したものとして、小論の結びにあたって引用する。

普通校の遠足と違って、お菓子は持参禁止、弁当は梅干しだけの日の丸弁当（昼食時には先生が点検に回る）剣道は正課、玩具であっても、執銃教練もあった。（運動会の花形は模擬演習）

しかし、当時としては珍しい民主的な教育もあった。生徒相互の選挙で級長を選び、級長会で生活の申し合わせをした。音楽教育も五線譜で教えられた。英語の授業もあった。これらの民主授業が取り入れられたのには、片桐武一郎校長の、軍部に対する只ならぬ抵抗があったろうに…と、今つくづく思う。とにかく不思議な学校で、総合して“良い進学校”であった。何よりも、背筋をシャンと伸ばす躰（しつけ）を受けた事に、感謝！

参考文献

- 同窓会山桜会 (1958年)『山桜会報第3号』: 追手門学院同窓会山桜会: p.16.
- 八束周吉編 (1958年)『七十年志』学校法人追手門学院: pp.94-95.
- 百年志編集委員会編 (1988年)『追手門学院小学校百年志』: 追手門学院小学校: pp.176-177.
- 片桐武一郎編 (1915年)『大正四年十一月 大阪偕行社附属小学校学報』: pp.21-22. p.150. pp.230-231.
- 天野利武編 (1968年)『八十年志』学校法人追手門学院: pp.344-345.
- 六稜 WEB 運営委員会編 (2000年)『われら六稜人 2000年度版大阪府立北野高等学校』六稜同窓会: 第31回
第1 映写室
- 林匡夫編 (1981年)『片桐武一郎先生』片桐武一郎先生を偲ぶ会: pp.145-146.
- 校友会山桜会 (1968年)『山桜会報第14号』: 追手門学院校友会山桜会: p.9.
- 校友会山桜会 (1967年)『山桜会報第13号』: 追手門学院校友会山桜会: p.15.
- 校友会山桜会 (2003年)『山桜会報第71号』: 追手門学院校友会山桜会: p.10.